

ハプスブルグ家家紋

世界でも最も格式の高い王族・貴族のひとつ、オーストリア・ハプスブルグ家の家紋・エンブレムが「双頭の鷲」であることは、普く世間に知れ渡っている。あの勇壮な行進曲「双頭の鷲の旗の下に」も、その当時オーストリア・ハンガリー帝国軍楽隊長だったヨーゼフ・フランツ・ワーグナー（「歌劇王」リヒャルト・ワーグナーとは別人）が一族の永遠なる栄光と繁栄を願って作曲したものである。

15世紀オーストリア・ハプスブルグ家のマクシミリアン王子がスペインのイザベル女王の王女を娶ることによって、ハプスブルグ家はスペイン王家との絆を結び、広くヨーロッパ皇室の間に勢力を築いていった。この政略結婚が縁となり、現在もスペインの古都トレドの城壁入口にはハプスブルグ家の家紋が掲げられている。入り組んだ狭い石畳のトレド市内には、大聖堂、市庁舎ばかりでなく一般家屋の門柱など、そこかしこにハプスブルグ家の家紋を見ることができる。驚くには当たらない。何とこの「双頭の鷲」は、今ではトレド市の紋章にもなっているのである。これをトレード・マーク？という。

しかし、日本でこの由緒ある家紋にお目にかかることは、そう滅多にはない。ミツコ（青山みつ）の夫・クーデンホーフ・カレルギー伯爵家にしてもハプスブルグ家と血縁関係はない。精々かつて女優として活躍した、鰐淵晴子の母親のルーツを追っていくとハプスブルグ家に辿り着くというエピソードがあるくらいである。

ところが、思いもかけず静岡県御殿場市郊外の富士霊園の一角に眠るひとりの外国人の墓石に、高貴なハプスブルグ家の家紋が刻まれているのである。

二年前の晩秋、セルビアに住む友人が一時帰国の折り、彼とともに両親のお墓にお参りした。聞けば、クロアチア人だった父親の親族が、戦いの勲功によりハプスブルグ家からその名誉ある家紋を下賜されたのだという。彼の両親は今あの秀麗の富士を望む小高い墓地に静かに眠っている。それは、生前友人の母親が非業の死を遂げた夫とともに富士山をずっと見ていたいと望んだ、辞世の言葉を友人が律儀に守ったからである。

昨年「古事記」のセルビア語訳書出版により、日本翻訳家協会特別賞を受賞した友人・山崎洋は、父の姓を漢字に置き換えてペンネームを「武家利一」と名乗り、今も異国で翻訳家として活躍している。その父とは、戦時中「ゾルゲ事件」に関与した罪により獄中で亡くなったブランコ・ド・ブケリッチ、その人である。

（近藤）